会　報　68　　白鷹町史談会

史　　談

2023（R５）６．１

■令和５年度史談会総会の案内

会員の皆さんには御健勝でお過ごしのことと存じます。さて、本年度の総会及び懇親会を下記のように開催いたしますので万障お繰り合わせの上御出席くださいますようお願いいたします。

記

1　期日　令和５年６月25日（日）
2　場所　十王地区コミュニティセンター
3　時間　午後１時から総会、講演会
4　総会内容
　⑴　令和４年度事業報告、決算報告
　⑵　令和５年度事業計画、予算案審議
5　講演会　午後２時15分から
　⑴講師　加藤和徳氏（県文化財保護協会理事）
　⑵テーマ　白鷹町の石造文化財について（仮）
　※非会員は資料代500円をいただきます。
6　懇親会　午後４時30分から（予定）
　　会費　1,000円　　非会員1,500円

以上

なお、本年度の会費を当日いただきます。どうぞ御準備ください。

また、講演は公開で行います。会員以外の方でも聴くことができますので、どうぞお誘い合わせのうえおいでください。懇親会も同様です。

■悲願の延伸　長井線が白鷹を通るまで

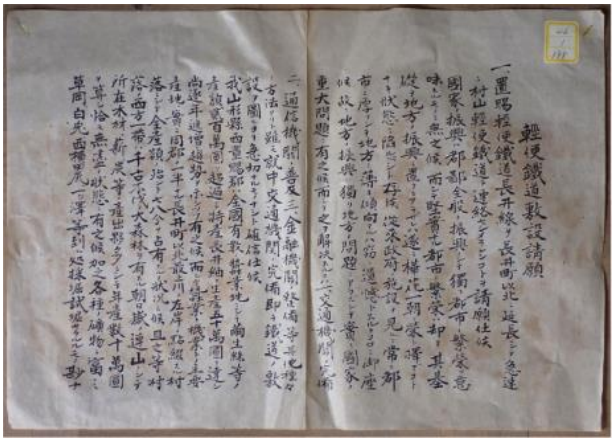
石井　紀子

4月22日に荒砥駅開業とフラワー長井線全線開通100周年の記念日を迎え、赤湯や羽前成田駅、鮎貝、荒砥駅などで催し物が開かれたり、ゴールデンウィーク中の山形新聞で連載されたりと長井線が大注目された日々でした。

今となっては意外に思いますが、当初、長井線（荒砥駅開業時は「長井線」と呼んだ）は赤湯駅から長井駅の区間で工事終了となる計画でした。これに対して長井以北の地域が荒砥までの延伸を願い、長井駅が開業してから3年後にようやく延伸の決定が下されます。長井線の工事開始は明治45年（1912）、長井駅開業は大正3年（1914）になります。

次に、線路の敷設ルートが問題になりました。最上川やその支流を渡るには鉄橋が必要になって工費がかさむこと、加えて洪水によって交通が途絶する可能性があるとの問題をあげて荒砥町や十王・東根村などは川東側への線路敷設を主張します（大正8年の「長井線延長ノ儀ニ付請願書」）。

一方、最上川西側の地域では朝日山系の豊富な天然資源の活用や、鮎貝・蚕桑・五十川村に駅を設置した時の利便性という具体的な提案をあげて敷設を請願します（大正5～8年の「軽便鉄道敷設請願書」、大正6年の「請願書」）。



大正5～8年（1916～19）「軽便鉄道敷設請願書」

結果的に、大正9年（1920）にルートが決定し、現在の長井線となりました。

当時の運動はかなり盛んだったようで、鉄道省や西置賜郡長などがルートの決定に困惑したほどでした。鉄道は移動手段だけではなく、経済と地域の発展をもたらす必要不可欠な存在であり、最上川舟運でその重要性を感じていたからこそ、地元に線路を引き込むために積極的な

行動が起こせたのでしょう。

町内出身の詩人芳賀秀次郎は、長井線に乗りたくて中学校を受験したと「わがうちなる長井線」に書いています。この鉄道に対する純粋な期待感には心を打たれます。

ぼくの好きな汽車のように、胸がドキドキするようなものが、きっとあるにちがいない。中学の試験に合格して、毎日汽車通学ができたら、その汽車の中にきっと「レンアイ」というものか、キラキラ光って落ちているのではあるまいか―ぼくはそう思った。

その頃の汽車は、いかにも小さな箱型で、ぼくらはこれをマッチ箱と呼んでいた。これには本線を走っている立派なボギー車との比較による、やや軽侮の感じもないわけではなかった。しかし、このマッチ箱という呼名には、もっと素朴であたたかい親愛の気持がこめられていた。だが、当時は、女学生の乗るマッチ箱と、中学生の乗るマッチ箱とは、厳然と区別されていたから、いくら探しても車中には「レンアイ」などは落ちこぼれていないようであった。

『やまがた散歩』昭和47年（1972）発行より

転車台にのる汽車（荒砥駅）

＊ここで紹介した資料は白鷹町歴史民俗資料館の企画展でご覧になれます。線路敷設地を決定するまでの経緯も紹介しています。

開館日：6月11日（日）までの金・土・日曜日
観覧料：一般200円、中学生以下無料

■令和５年度の主な行事予定

新型コロナがおとなしくなってきました。また、法律上の扱いも変わってきました。気をつけながら史談会の活動もがんばってゆきたいと思います。

主な活動をお知らせしておきます。

研修旅行
1　期日　令和5年9月21日(木)か14日（木）
2　行き先　多賀城市、仙台市方面

研修会
1　期日　令和6年2月
2　内容　町報の「さんぽ道」令和4年度掲載分

■さまざまな活動が活発になりました

新型コロナ感染症の位置づけがインフルエンザと同じになりました。それに伴い、様々な活動がコロナ以前に戻りつつあるようです。

春には各地のお祭りが復活しました。観光地の賑わいも次第に戻りつつあるようです。また、様々な団体の活動も活発になりつつあるようです。けれどもどこかに「おっくうさ」が残っているのは筆者だけではないのではないでしょうか。気持ちを奮い立たせて動き出さないと、外へ出ることが難しい気持ちがあります。

先日、久しぶりに多賀城市の東北歴史博物館へでかけてみました。開催されている特別展「東日本大震災復興祈念　悠久の絆　奈良・東北のみほとけ展」を見るためです。

どこかに「思い切って」という気持ちがありましたが、帰ってから「行ってよかった」と思う気持ちがいっぱいでした。「コロナに負けない」というのはこんなことから始まるのでしょう。　（守谷）